

## 「50年前の書棚」

(2004)

まだまだ厳しい寒さの残る2月中旬、久し振りに午後の日差しが明るく、窓辺にリクライニングチェアを運びいつものように、午後3時に配達される地方夕刊紙をゆっくりと読む、隅から隅まで目を通して30分も掛からない。暖房無しでも温かく、心地よいガラス越しの日差しの中で、新聞だけでは読み足らず、その後、いつもの様に手を伸ばせば届く書棚に並んだ昔の古びた本の中から興味をそそられた1冊を取り、さらっと読んでみる。先週来から原田康子や森蓉子の短編を拾い読みしている。

今日は井上靖の昭和24年の処女作「猟銃・闘牛」を手に取ってみた。文庫本は背の部分はさすがに50年の空気に曝され薄黒くなつて入るが、「丁寧にパラフィン表紙や帯が買った時のまま未だに付いている、値段は80円とあった。僕は、昔読んだ本には必ず最終ページに読み終わった日付を書き入れる習慣が身についていた。

中学3年の時の担任の先生に読書の心得を教わったのを思い出す。新しい本を買つたらまず真ん中の所から左右に開き一押しし、次は前から1／4、次は後ろから1／4・・・を開き、表紙カバーや帯はそつと取り除いておき、読み終わつたら改めてカバーを付け直し、読み終わつた日付を書いておくと良い、出来れば感想のひと言でもメモして挟んでおくと良い・・・と教えられていた。

最終ページに37・12・10・・・・と言つ鉛筆書きの小さな書入れがあつた、今になつてみると懐かしい、昭和37年・・・大学1年の時だ。

片手間の読書だから短い方が良いと思い取りあえず70ページの「獵銃」を読み始めた、井上靖らしい小説構成と詩的な文体が僕は昔から好きだった。内容は、1篇の短編小説を巡り、中年男が妻の自殺のあと、3人の女性・・・娘、恋人、そして死んだ妻から受け取った3通の手紙を読んでの心情をその作家に書き綴るという構成であった。他愛無いと言えばそれまでのありふれた愛情の葛藤劇だ。50年前、間違いなく僕はこの本を買い、12月の或る日に読み終えたという記録があるだけで、残念ながら読書感想メモは無く、内容についての記憶は明瞭ではない。当時は小説と言えば内容よりは「文体」の妙に惹かれ、井上靖、三島由紀夫、大江健三郎、駆け出しの頃の宇野鴻一郎などを読み漁っていた記憶がある。又文体と言えば翻訳物の文節の長い文体を必死で読んでいた。ヘッセ、サガル、モーム・・・特にヘッセは内容も丁度僕達の青春の想い・考え方・苦悩を代弁しているようで感動した。

そして数日前からはマルキド・サドの「悪徳の榮え」・・・厚さは1.5cmはある分厚い昔の角川文庫本（490円）だが、サラッと読んでみるつもりだったが、読み始めたは良いが余りに面白く、二二三日間読み耽っている。

書架冷ゆる ヘッセ置かれて五〇年  
春愁のヘッセを開き拾い読み

初時雨 二十歳のエチユード拾い読み  
若き日の蔵書は冷ゆる 眼もそぼる

みじかよ  
短夜の眼球重き読書灯

捨てられぬ蔵書に埋もれ冬を篭り

一人居の活茶を炒れて秋灯

千冊の建築誌棄て 秋涼し

力学の本捨てられず年暮るる

いちらう  
銀杏葉やランボーの詩に葉あり

春闲ける字源の埃れいけり

書架見れば若き日疼く憂国忌

大字源埃積もりて夜の冷え

大字源ありて冬夜の灯りあり

若き日の 本の書き込み水の春

流れ星詩人たり我が青年期

思春期の文庫本読む秋灯し